

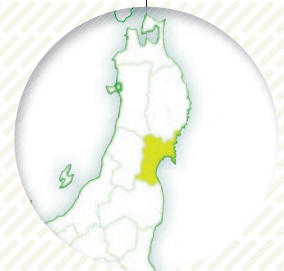
# 地方の常識

地域特性を活かした独自規格

## 第6回

### 電話ボックスの基礎台

### 高さや雪への対応



**雪** のイメージは、かわり方や住む地域によりさまざまであろう。私は

長らく青森県の雪深い地域で生活し、現在は宮城県仙台市に住むが、冬の生活感覚は地域によりずいぶん違うものだと感じる。

積雪の多い地域では、地域に応じたさまざまな雪対策（吹雪対策、雪崩対策など）



写真1 高い基礎台の上に設置された公衆電話ボックス(撮影：国道48号沿い(宮城—山形県境))

を見ることができ、今回取り上げたのは公衆電話ボックスである。

公衆電話には、通信手段維持のため利用頻度の低い箇所を含めて一定の密度で公道周辺に設置される「第一種公衆電話」と、特に設置に関する制限がなく高頻度の利用が見込まれる場所に設置される「第二種公衆電話」が存在する。

第一種公衆電話は、緊急時・災害時の通信手段として、また戸外での最低限の通信手段として重要な役割を担っており、市街地で約500m、郊外で約1km四方に1台で配置されることが電気通信事業法令で定められている。このため、さまざまな設置環境に対応する必要がある。なお第二種公衆電話は、電気通信事業法令上の定義はない。

雪の多い山間部などを車で走行していると、高い基礎台の上に公衆電話ボックスが設置されているのときおり見かけることがある。この高さは地域や路線により違いがあると思いい、NTT東日本に問い合わせ

せてみた。

この結果、公衆電話ボックスの基礎台寸法は、浸水高さや積雪深などの自然環境や使用頻度(重要性)などを考慮し、設置環境に応じた設計を行ってきたことから、さまざまな高さのものが存在するのとであった。ただし、現在では公衆電話ボックスの新設における規格は全国共通であり、地域によるグレードの違いはなく、今後このような高い基礎台は新設されないとのこと。テーマパークなどで見かけるデザイン性の高い公衆電話ボックスも、かつては設置場所のイメージに合わせて設計されることが多かったとのことであるが、今後はあまり見られることはなさそうである。また、基礎台の材料や設置深さについても、現在では特に地域による考え方の違いはないとのことであった。いずれも、公衆電話の需要が低くなってきていることが背景としてある。

日本で最初に公衆電話ボックスが設置されたのは1900年。赤電話の登場や



写真2 復原されたわが国初の電話ボックス(香川県高松市)(提供：(財)日本公衆電話会)

テレホンカードの普及などにより設置台数は徐々に増加し、1985年には90万台あまりに達した。この間、車椅子対応公衆電話ボックスの登場など、情報のユニバーサルデザイン化にも対応してきた。

その後、携帯電話の普及に伴い、第二種公衆電話を中心に撤去が進み、近年は30万台程度にまで減少している。ただし、第一種公衆電話はほぼ一定の台数が維持されており、有事の通信手段としてその役割を果たし続けている。

### 伊達 政直

正会員 東北電力(株)

(取材協力：(財)日本公衆電話会)